福音のためならどんなことでもする

仙台北伝道所の開設　1980年

～ 仙台教会の歴史シリーズ　その25 ～

小林孝男

はじめに

現在の仙台長命ヶ丘キリスト教会（旧仙台北バプテスト教会）の前身は、仙台教会を母教会とする仙台北伝道所でした。この伝道所誕生の背景には次のような状況がありました。

1970 年代の日本バプテスト連盟は、「自立と協力」が大きなテーマとなっていました。ミッションボードからの支援が漸減されるという外的要因や、国内的には、米国依存体質や戦前復帰の社会的風潮や戦前の教会の在り方への反省や総括なしで、教勢拡大を目指す在り方を自ら厳しく問い直す中、連盟は経常費自給という大きな決断をしたからです。それによって痛みを伴う機構改革や規約改正が実施されることになります。伝道協力体である連盟の中心課題は開拓伝道ですが、自給化に伴う緊縮財政は、この面においても大きな影響を与えることになります。県庁所在地や主要都市に点となる教会を生み出し、その点をつなぎ線を作り更に面へと広げていく、という従来の開拓伝道構想も困難にならざるを得ない状況となりました。緊縮財政のもと、福音の前進のために限られた貴重な資金を有効に活用する新たな方策を、全体的視野に立って模索する必要に迫られたのです[1]。

そのような厳しい状況の中、1978 年（昭和 53）の第 32 回連盟年次総会において、神戸と仙台で全国支援拠点開拓伝道を実施するという理事会案が可決されました。

１．教会員の躊躇

（1）市内に全国支援開拓伝道が？！

連盟宣教委員会で「仙台市内にもう一つの拠点教会を」という驚きの案が話し合われていることを、仙台教会のメンバーが知ったのは 1977 年（昭和 52）年 9 月 25 日の週報においてです。当時連盟宣教委員だった当教会の天野五郎牧師が、9 月 20～22 日に箱根で開催された連盟宣教委員会の様子を、牧会通信（「市内に全国支援開拓伝道が？！」）の中で次のように速報しています。

「連盟宣教委員会で極めて重大なことがクローズアップされてきた。仙台市内にもう一つの拠点教会をつくろうという、連盟の全国支援開拓伝道案だ。今年中に調査に

かかり、来年度の年会で通ったら、明後 79 年から実施、ということになる。母教会よりの株分け、そして 5 年内に教会組織をめざす、という条件がつく。他に有力候補として神戸が挙げられているが、東北連合強化のためにも仙台が急速に浮上してきた。

いずれにしても、海外からの援助資金を 0 として連盟自力で開拓伝道を行う場合、4 年に 1 カ所（7 千万から一億）がせいぜいとの試算が出されていた。果たして仙台が連盟長期活動計画中の大切な拠点教会をもう一つ持つことができるかどうか、山形、南光台両伝道所の教会形成への歩みと共に大きな夢（課題）が与えられそうなこととなった。今日の役員会での議論を経て、みなさんともごいっしょにこの夢について近く考えてみたい」。

（2）夢と躊躇

全国支援拠点開拓伝道の候補地として仙台が浮上したという情報は、教会員にとっては寝耳に水でした。天野師はいみじくも牧会通信の中で「夢」という表現をされましたが、確かに最初の段階でこの案は夢であり、多くの教会員には現実感の伴わないものだったのではないでしょうか。ですから具体的にどのように考え、どのように対処し、どのように決断していけばいいのかについて、教会として意思を統一していくためには十分な時間が必要でした。1977 年（昭和 52）11 月の臨時総会、1978 年（昭和 53）1 月の新年総会、7 月の臨時総会と話し合いを重ねながら、教会員の気持ちが次第に収斂されていきます。ただし、南光台伝道所の母教会として、今は自分たちの思いと行動を南光台に注ぐ必要があるのではないか、という意見は当然根強くありました。さらに、全国支援拠点開拓伝道の母教会となった場合、拠点開拓伝道費用の一部を母教会が引き受けなければならないという点に関して、果たして財政的に可能だろうかと危惧する意見も残りました。

（3）賽は投げられた

そういった中、1978 年（昭和 53）8 月 2～4 日に天城山荘で開催された連盟年次総会で理事会案が可決され、神戸と仙台で全国支援拠点開拓伝道が展開されることになりました。賽は投げられたのです。これは神のご計画であると確信し、感謝をもって全力で事に当たることこそが、私たちがなすべきことであり、大きな夢を現実にしていく道を歩むことが、私たちの信仰的使命となったのです。

翌 1979 年（昭和 54）7 月の臨時総会で、拠点開拓伝道費用 6,500 万円の一部を仙台教会が負担するため、当教会は連盟の回転資金から 300 万円借入することを決議し、10 月の臨時総会では、拠点開拓伝道の担当牧師として、連盟常任理事会から推薦

があった野口直樹師[2]の招聘を決議しました。

そしていよいよ 1980 年（昭和 55）1 月 20 日から仙台市北部の長命ヶ丘の借家で礼拝を開始することになります。野口牧師ご一家は 4 月に来仙されますが、それまでの間はボートライト宣教師が中心となり開拓伝道の働きを担いました。

２．戸惑う地域の中で

さて、長命ヶ丘で開始された開拓伝道は最初から躓きました。1、2 回借家[3]で日曜日に集会を行った段階で、急に転居を求められてしまったのです。家主側から伝えられた理由は、家庭状況の変化（「病気になった父親と同居するため」[4]）ということですが、自分の家が「バプテスト」などという得体のしれない宗教団体の礼拝施設として使用されていることを知り、家主が不安を抱いてしまった可能性もなくはありません。借手側としては正当な手続きを踏んでいますので、自分たちの権利を強く主張することもできたのでしょうが、ボートライト宣教師は穏やかに家主の主張を受け入れ、転居先を新たに探すことになります。

その時代はカルト的な宗教団体による訪問伝道や霊感商法が、大きな社会問題となっていた時期です。一般の方にとってはそういった宗教団体もキリスト教も十把一絡げで見てしまうでしょうから、不安な思いを抱き、拒否反応を示し、関わりを避けることが一番安全と考えるのは自然なことです。

このような地域の中での開拓伝道です。まずいかにして地域住民からの信頼を勝ち取るのか、これが先決問題となります。家主からの突然の、そして契約して間もない時期の転居要請を、ボートライト師が笑顔で受け入れ、穏やかに、また誠実に対応したことが、地域住民から信頼を得る第一歩となったと考えることは、決して的外れではないでしょう。開拓伝道開始の最初の段階から、地域の信頼を勝ち取る道を主は不思議な仕方で準備してくださっていたのです。

３．福音のためならどんなことでもする

新たな借家[5]を見つけ、2 月中旬に契約を交わし、3 月 9 日（日）からその場所で集会を開始します。そして 4 月 2 日（水）には野口直樹牧師、妻和子さん、母徳子さんが来仙し、また母教会から古川明・栄子夫妻、小林孝男・啓子夫妻が仙台北伝道所に派遣され、いよいよ働きが本格化しました。

戸惑いや警戒心、そして無関心の渦巻く地域の中、その状況を少しずつ打ち破って

いったのは、「福音のためならどんなことでもする」[6]という牧師、宣教師、伝道所メンバーの信仰姿勢でした。特に野口牧師は、ご自分のキャリア、性格、人脈、賜物をフルに活用し、開拓伝道の業に力強く取り組まれ、たくさんの特別集会を企画・実施されました。例を上げれば、田原昭肥・米子夫妻集会、宮城学院のランデス宣教師による人形劇、常盤台教会聖歌隊集会、加藤享牧師集会、江藤淳一家集会、恵泉教会の恵泉会による集会、宣教団音楽チーム伝道、ニュートン師による集会、荒瀬昇牧師集会、胡美芳集会、尚絅学院の学院長甲原一先生集会、田村大三指笛集会、車潤順先生集会、加来国生集会、再度の田原昭肥・米子夫妻集会、米国伝道チーム集会、加来剛希集会などです[7]。それらの集会のたびごとに、地域にチラシを配り集会のご案内を行いました。特に野口牧師夫妻とボートライト宣教師は戸別訪問を丁寧に行い、仙台北伝道所の知名度を高めると共に、地域の中で良い人間関係を築き上げていきました。

開拓伝道を開始した年の 11 月には最初の信仰決心者が与えられ、翌 1981 年（昭和 56）9 月には新会堂が与えられます[8]。1983 年（昭和 58）には伝道所総会で自給を決議。そして 1984 年（昭和 59）4 月 30 日（月）に教会組織会議を開催し、全国諸教会からの祈りと捧げものに支えられながら、仙台北バプテスト教会が誕生する運びとなります。感謝。

---

[1] 詳しくは『日本バプテスト連盟七十年史』の 184 頁以降に、金子純雄師が「自立と協力の内実を求めて（1971～82）」のタイトルで詳しくまとめている。

[2] プロフィールは、「翁・直樹のホームページ」参照
https://sites.google.com/site/okinanaoki0812/home/seychelles?authuser=0

[3] 長命ヶ丘 2-16-1

[4] 週報（1980/02/17）

[5] 長命ヶ丘 3-11-13

[6] Ⅰコリント 9:23 参照

[7] 資料（1994/05/00_仙台北バプテスト教会の歩み_宣教十五年記念文集）

[8] 礼拝堂 171 ㎡（52 坪）2,300 万円、牧師館 100 ㎡（30 坪）1,200 万円、敷地 909 ㎡（275 坪）3,500 万円、備品等 150 万円　総費用 7,150 万円